

## 香を想う

——幸田露伴「楊貴妃と香」の典拠と方法——

西 川 貴 子

花の色は雪にまじりて見えずともかをだにはへ人の知るべく

(小野篁『古今和歌集』巻六)

### 1 「か」を語ること

冒頭に掲げた和歌は、幸田露伴の「か」をめぐる考証「香談」(『中央公論』昭和一八「一九四三」・一)の中で紹介されたものである。雪で見えないとしても香で人に場所を知らせてほしいという歌——すなわち眼では見えないからこそ、かゝ香が存在のたよりになるというのである。露伴は「香談」の執筆動機として、冒頭で、「世界」は「人の眼・耳・鼻・舌・身・意に対する色・声・香・味・触・法」で成立しているのに、「にはひ」に関する専門書が少なく、「人のにはひに心を用ゐる意を致すこと未だ博く深からず」打ち捨てられていることを惜しんだことを挙げている<sup>①</sup>。実際、この

時期、露伴は一色梨郷『香書』(昭一六「一九四一」・一〇)<sup>②</sup>の原稿に朱を入れて助言をし、出版の折には「題言」も書いたり、香を聞く会を自宅で行なったり、昭和一七「一九四二」年五月一〇日の句会でも香のことについて語ったりするなど、香への関心を高めていた<sup>③</sup>。

また「香談」の二年前には随想「楊貴妃と香」(『知性』昭和一六「一九四一」・三三)を発表している。「香談」は、主に日本の古典に見られる「か」に関する語義をめぐる考証となっているが、「楊貴妃と香」では、楊貴妃の領中りゅうちゆうから漂う龍腦香に、亡き楊貴妃を想い涙する玄宗皇帝のエピソード等を交えながら、龍腦をめぐる話が展開されていた。まさに見えないからこそ(この場合は実際には永遠に見ることがかなわないう状態となるが)、見えない存在への強い想いが「香」によって掻き立てられるのである。見えないものを辿る、

「にはひ」の世界への興味。「楊貴妃と香」が同様の関心のもと、成立していることは先の玄宗のエピソードが中心に据えられていることからわかるが、しかし「楊貴妃と香」では、先に挙げたような「にはひ」に対して世人の関心が薄いという状況を踏まえた発言はない。この文章は次のように始まる。

此の數年来視力が大に衰へて、毛筆で細字を為すには堪へがたくなり、又地図の如き文字の意義の聯絡無きものを看ることは殆んど難くなつたので、眼鏡を屢々換へはしたが、それでも遂に思ふに任せなくなつた。〔…〕其時自分が既に白内障しろそこひ眼になりつゝ、あることを指摘されたので、それからは白内障といふものに心が惹かる、やうになつた。〔…〕たゞ平生読書の際なんどに、白内障といふ語に出会つた折に心が留まるといふだけなのである。〔…〕其龍腦が内外障眼を主るとあつたので一寸心が留まつた。〔楊貴妃と香〕

ここでは、自身の白内障による視力の衰えについて触れられ、そこから「白内障」という語に心が惹かれたため、たまたま『續博物志』の龍腦という香の記述に注目したことが語られている。「楊貴妃と香」の執筆は、自身の眼病という個人的な関心を発端にした

ものであつたことが明示されているのである。

また、同時にここでは、白内障を契機に文字を「意義の聯絡」として読み取りづらいたとも明かされていた。文字を「意義の聯絡」として読み取ること。考えてみれば、この文章では文字そのもののみならず、数々の書物の記事や逸話もまた語り手である露伴の「意義の聯絡」、イメージの連鎖として——眼病という個人的な話題から、龍腦、そして楊貴妃と玄宗の逸話へ——展開されている。

そこで本稿では、単に従来あまり取り扱われてこなかつた「にはひ」の世界を披露するということに止まらない、「楊貴妃と香」という作品が有する魅力について考察する。具体的には、本作と典拠との関係に注目することで、ここで提示される記事・逸話の意義の聯絡の付け方を読み解いていきたい。また併せて、掲載雑誌におけるこの作品の位置づけについても考えてみたい。

## 2 典拠について

「楊貴妃と香」では、『續博物志』から始まり、『西域記』『金光明經』など、様々な書が挙げられている。はたしてこれらの書を全て露伴は見たのか。もちろん、この中のいくつかを原典で見たことはあつたかもしれない。しかし本文自体は、主に『香乘』の記述に拠っているといつていいだろう。「楊貴妃と香」で直接、名前が挙

げられている書は、『續博物志』『西域記』『金光明經』『酉陽雜俎』『香譜』『本草』『徒然草』『華夷續考』『一統志』『搜神記』『埤雅』『北戸録』『墨莊漫録』『梁四公記』『楊貴妃外傳』『獨異志』である。このうち、後述するように、甲香に言及のある『徒然草』や麝香のことを記した『埤雅』、楊貴妃と寧王の関係を記した『獨異志』の三つの書の記事のみ、『香乘』には見られない。また、『搜神記』の記事については、『香乘』の記事に加えて大幅に情報が追加されている（この点についても後述する）。その他の書物から紹介される話は全て『香乘』巻三「香品」の中の龍脳に関する記事の中に載せられており、内容もほぼ全て一致している。『香乘』は明の周嘉胄が編纂した二八巻から成る香に関する本で、「香品」「香事分類」「香爐類」などの分類をし、香に関わる記事を様々な書から抜粋、引用して掲載した書である。清の乾隆帝の勅命により編纂された漢籍叢書である四庫全書にも収録されている書だ。露伴が調査をする際に、その四庫全書の解題をまとめた『四庫全書総目』を参照し、そこから原典にあたって調査するなど活用していたことは、明治三六「一九〇三」年一月四日付の内田魯庵宛の手紙内で、Mark Russelの海事に関する小説雑書のうちでどれがよいのか問い合わせた折、「泰西の四庫全書目なきには困りいり候」という言葉があることから明らかだ。<sup>④</sup>

香を想う

例えば、この話の発端ともなっている『續博物志』の記事について「楊貴妃と香」本文と『香乘』の文章を見てみよう。なお『香乘』の本文については、『筆記小説大観』<sup>⑤</sup>所収のものをここでは用いる（理由については後述する）。

乾脂を香と為し、清脂を膏と為す、子は内外障眼をつかまど主る。又蒼龍腦有り、点眼すべからず、火を経るを熟龍腦と為す。これは續博物志の語であつて、龍腦のことを言つたのである。（『楊貴妃と香』）

乾脂為香清脂為膏子主内外障眼又有蒼龍腦不可点眼經火為熟龍腦（續博物志）（『香乘』）

両者を比べてみると、本文と記事とが一致することがわかるだろう。また、次のように「楊貴妃と香」の本文では、特に出典が記されていない事柄であっても、『香乘』本文と一致する部分がある（この部分は『香乘』でも出典が記されていない）。

相思子と糯米の炭とを合せて龍腦を貯へて置けば則ち耗らぬと言ひ、或は又鶏の毛と相思子とを同じく小瓷罐に入れて収め置

香を想う

けば龍腦は耗らぬといひ、〔…〕（楊貴妃と香）

置くことにする。

一七八

龍腦香合糯米炭相思子貯之則不耗或言以鷄毛相思子同入小瓷罐

密收之佳相感志言〔…〕（香乘）

『香乘』で該当する文章を以下、部分的に抜粋する。

ただし、これだけでは引用の仕方がわかりにくいので、次の文章

A 樹高八九丈大可六七圍葉白而背白無花実其樹有肥有瘦瘦者有婆  
律膏香〔…〕（酉陽雜俎）

も例として挙げたい（『香乘』と一致する部分を点線と記号で示す。  
以下、引用文中の傍線は全て引用者による）。

B 西方抹羅短吒国在南印度境有羯婆羅香樹松身異葉花果斯別初採  
既湿尚未有香〔…〕（大唐西域記）

婆律樹は樹高八九丈、大き六七圍ばかり、葉白にして背白

C 片腦産暹羅諸国惟仏打泥者為上其樹高大葉如槐而小皮理類沙柳  
〔…〕（華夷續考）

く、花実無し、と段成式は云つてゐる。段成式は唐の詩人で学

D 渤泥片腦樹如杉檜〔…〕（一統志）

者で、多く支那域外の事物を知つてゐることに於ては、此人は  
どの人は無いかと思はれるほどの人であるが、無花実の三字は  
蓋し誤謬で、花もあり子もあるから、何様も不審である。B松

記事が一致することは一目瞭然だが、注意したいのは、それだけ  
ではない。語り手は、『香乘』で引用されている諸書の各記事から  
龍腦樹とされる婆律樹の特徴を抜き出して整理した上で、書によつ

身異葉、花果斯別の八字は、西域記の文、其樹高大、葉は槐  
の如くにして小、皮理は沙柳に類すとは華夷續考の記、D樹は  
杉檜の如しとは一統志の説、土地が異なれば樹も異なるに、書  
が別なれば樹も別なのか、今日龍腦樹といふのは確定してゐる  
が、書齋の中からは植物学を取めぬものは判断を差控へるのが  
正当だから、古書善読は甚だ難いものと、今は其仮返却して

て龍腦樹に関する記事が異なっている点を指摘している。しかし、  
婆律樹とは正確にはどういふものなのか、どの記事が正しいのかと  
いう選別は行なわない。語り手は、龍腦樹が様々な形で多くの書に  
取り上げられているということ自体に興味を覚えているのであり、  
植物学などにおける学問的な見地に基づいた正しさを求めようとは

していないのである。このことは、「楊貴妃と香」という文章が、あくまでも語り手の個人的な関心に基づいた事柄が興の向くままに披露された文章であるという性質をよく表わしている。

とはいえ、「香乗」自体が、様々な書から記事を抜粋し引用して編んだものなので、『香乗』の引用元の記事と『香乗』本文、そして「楊貴妃と香」の本文を比較しても、一致するものがほとんどだ。そこで、「楊貴妃と香」本文と『香乗』本文との内容はほぼ一致するが、『香乗』の引用元になっている書の記事とは異なる部分をここで挙げたい。

まず、楊貴妃が安祿山に龍腦を与えたという「楊貴妃と香」中の次の記述に注目したい（点線部が「楊貴妃と香」本文と『香乗』本文および『香乗』の引用元の記事との三者全てが一致する部分で、波線部が「楊貴妃と香」本文と『香乗』本文の二者の記述のみが一致する部分である）。

楊貴妃が玄宗から賜はつた龍腦を、安祿山に三枚与へ、其余は壽王に餽つたので、楊国忠が愚癡をこぼした談は、楊貴妃外傳に出てゐる。（楊貴妃と香）

このように本文では「楊貴妃外傳」に載せられている逸話として

香を想う

紹介されている。「楊貴妃外傳」と一口に言っても色々あり、例えば、正史である『旧唐書』や『新唐書』の記事や、各書の記事を抄録した『説郛』や『類説』の外伝、そしてそれらを取り入れた形で宋代に作られた伝奇である「楊太真外傳」などがある。ここでは『国訳漢文大成』<sup>⑥</sup>にも収録され外伝として普及していた「楊太真外傳」での、次の記述と比べてみよう。

交趾より龍腦香、蟬蛩の状あるもの五十枚を貢す。波斯言ふ老龍腦樹節方あるもの禁中呼んで瑞龍腦となす。上妃に十枚を賜ふ。妃私に明駝使を發し三枚を持して祿山に遺らしむ。

〔交趾貢<sub>下</sub>龍腦香。有<sub>二</sub>蟬蛩之状<sub>一</sub>五十枚。波斯言老龍腦樹節方有。禁中呼為<sub>二</sub>瑞龍腦<sub>一</sub>。上賜<sub>二</sub>妃十枚<sub>一</sub>。妃私發<sub>二</sub>明駝使<sub>一</sub>。持<sub>三</sub>三枚<sub>一</sub>遺<sub>二</sub>祿山<sub>一</sub>。〕鹽谷温訳注『国訳漢文大成』一二卷、大正九「一九二〇」・一二一、国民文庫刊行会

そして、この部分は『類説』中の「楊妃外傳」でも同様に、「交趾進龍腦香有蟬蛩之状波斯言老龍腦樹節方有之禁中呼為瑞龍腦妃私發明駝使持<sub>三</sub>三枚<sub>一</sub>遺<sub>二</sub>安祿山<sub>一</sub>明駝者眼下有毛夜明日行五百里<sup>⑦</sup>」と、楊貴妃が龍腦を安祿山に与えたことしか書かれておらず、壽王へ贈ったことも、楊国忠がそのことについて何か言ったという記載もない。

『説郛』の外伝等、この逸話を載せている記事も『類説』とほぼ同様である。しかし、『香乘』の「遣安祿山龍腦香」の文章では次のように、「楊妃外傳」の記事として、楊貴妃が安祿山だけではなく壽王へも龍腦を与えたことや、楊国忠の發言の記載がある。

貴妃以上賜龍腦香私發明馳遣安祿山三枚余婦壽邸楊国忠聞之  
入宮語妃曰貴人妹得佳香何独吝一韓司掾也妃曰兄若得相勝此十  
倍（楊妃外傳）

さらに「楊貴妃と香」では、馮謐が周りを制し、自ら進み出て玄宗から龍腦をもらったという次のような逸話が特に出典が明かされないまま紹介されている。

玄宗の時、龍腦を群臣に賜はらせんとするに当り、馮謐といふものが、臣請ふらくは陳平に倣つて宰と為らんと云つて、人々に跪受させた後、まだ半分ほど余つてゐたのを捧げ拝して、これはそれがしに勅賜、と云つて取つてしまつた談などは人を笑はせる。（楊貴妃と香）

この逸話については、『類説』等では「玄宗夜宴以琉璃器盛龍腦

数斤賜群臣馮謐曰請效陳平為宰自丞相以下皆跪授尚余其半乃捧拜曰勅賜録事馮謐玄宗笑許之」となっており、「玄宗」となっている。しかし、『筆記小説大観』および『欽定四庫全書』に収録されている『香乘』では、「賜龍腦香」の項目で、「唐玄宗夜宴以琉璃器盛龍腦香賜群臣馮謐曰臣請效陳平為宰自丞相以下皆跪授尚余其半乃捧拜曰勅賜録事馮謐玄宗笑許之」と出典の記載がないまま紹介されている。ただし、同じ『香乘』でも、国会図書館所蔵の清代の刊本や早稲田大学所蔵（今泉雄作旧蔵）の写本では、「玄宗」となっている。

これらのことから、露伴は「楊貴妃と香」を執筆するにあたっては、主に『香乘』、なかでも『欽定四庫全書』や『筆記小説大観』に収録されているものと同系統のものを参照したと考えられる（なお、『欽定四庫全書』収録の『香乘』と『筆記小説大観』収録の『香乘』では、本文の内容自体の違いは見られない）。ただし、『梁四公記』の文章として、「楊貴妃と香」本文で掲載されている次の羅子春の逸話は、いずれの『香乘』とも少し異なっている（点線部は、「楊貴妃と香」本文と『香乘』本文との二者が一致する部分。棒線部は「楊貴妃と香」本文と『香乘』本文との二者で異なる部分である）。

羅子春が梁の武帝の為に海に入つて珠を取らんと欲した時に、龍腦が無くては其事は諧ふまいと炎公といふ人が言つた談が、梁四公記に出てゐるのが古いらしい。(「楊貴妃と香」)

羅子春欲為梁武帝入海取珠杰公曰汝有西海龍腦香否曰無公曰奈何御龍帝曰事不諧矣公曰西海大船求龍腦香可得(梁四公記) (「香乘」)

話の内容自体は大して変わらないのだが、比べてみればわかる通り、「杰公」が、「楊貴妃と香」では「炎公」となっており、また、珠を取ることができない(「事諧はず」と言つたのが、「香乗」の記事では「帝」になっているのに対して、「楊貴妃と香」では「炎公」となっているという違いがある。「事諧はず」の主語については、「香乗」の短い文章だけ読んだため起きた誤解、あるいは、内容的には大きく変わらないので、あえてわかりやすく簡潔にしたた

杰公

図1

めの改変ともとれるが、「杰公」が「炎公」となっていることについては一考が必要だろう。「図1」は「欽定四庫全書」版の

炎公

図2

「香乗」本文の「杰公」で、「図2」は、「筆記小説大観」版の「香乗」本文である。

香を想う

比べてみればわかる通り、「図2」「筆記小説大観」版の字であるならば、「炎公」と読み取つてもおかしくないのではないか。露伴の蔵書目録に「筆記小説大観 四函」の名があることも考慮すると(ただし「四函」の具体的な中身は不明)、露伴が参照した「香乗」に最も近いものとして、本稿では「筆記小説大観」収録の系統の「香乗」を典拠として挙げたい。

### 3 意義の聯絡の付け方

前章で「楊貴妃と香」が「香乗」を典拠としていることを明らかにしたが、しかしこの作品が「香乗」の記事をそのまま載せているわけではないことは、龍腦樹とされる婆律樹の特徴を抜き出して整理し自らの見解を加えていた先の例からも明白だ。そもそも、この随想は、先述した通り、語り手の白内障を契機として繰り広げられていた。本文中では、「香乗」という書の名前は一切出されないまま、様々な書における龍腦をめぐる逸話(実際には「香乗」に記載されている記事)が「自分」の見解とともに披露されていく。そして最終的には「龍腦の談の圧巻」として玄宗が亡き楊貴妃を想う逸話へと展開していくのである。

そこで、今度は、この逸話の結び合わせ方、意義の聯絡の付け方を考えるために、「香乗」には記載がないが、別の書から選び取ら

れ挿入された話について見ていきたい。『香乗』の記載にない事柄としては、大きく分けて次の三つが挙げられる。すなわち、一つ目は自らの病である白内障をめぐる記述、二つ目は「相思相宜の談」をめぐる記述、そして三つ目は、楊貴妃をめぐる逸話である。

一つ目の自らの病である白内障をめぐる記述は、この作品全体の発端の話となっており、この話があくまでも「今」の「自分」の個人的な興味によって貫かれていることを示すものとなっていることは再三、述べた通りだ。ここでは二つ目の「相思相宜の談」についてまず、注目したい。この部分では、まず、いかに香気がとび散り消耗しやすいか、またそれを防ごうと注意が払われているかを表す例として、『徒然草』にある甲香の名が挙げられている<sup>⑪</sup>。そして、先に例として挙げた、龍腦と相性がよく香りを引留めるものとして、糯米もちろみや杉の木、炭、相思子があるという『香乗』に記載の話を紹介する。さらにそれだけではなく、麝香と相性の良いものや悪いものについて『香乗』の龍腦に関する文章に記載のない『埤雅』<sup>⑫</sup>の逸話も引いている。また、龍腦をなげうち穢れを払うことについて「数年前我が汽車の中で緑色の塩様のものを撒いたと同じこと」と言ったり、「家猫が其主人の喘息の原因となる場合も有るといふアメリカ医説」に触れたりするなど作品発表時の現在にも引きつげながら、龍腦と鶏の毛が相引くことが信じられ、実際にも匂いが永く残ると

いうことは「有り得ること」「全然形無しのことではあるまい」という見解を加えていくのである。このように、語り手は「相思相宜の談」については、『香乗』の記事以外のことも積極的に取り入れながら、糯米や炭等と龍腦との相性は妄談かもしれないが、龍腦香の香が永く残ることがあり得ないことではないということを説明し、後に紹介する、楊貴妃の領巾から玄宗が龍腦香の匂いを嗅ぐという逸話にも信憑性があることを示す布石としているのである。

さらに、『香乗』「相思子と龍腦相宜」中の『搜神記』の記事が、「相思子有蔓生者与龍腦香相宜能令香不耗韓朋拱木也（『搜神記』）とごく簡単なものに対して、次のように『搜神記』（卷一一第三三）の逸話を詳細に紹介している点にも注意したい。

千寶は記して曰ふ、大夫韓馮の妻が美しかったので、宋の康王が之を奪つた。そこで馮は自殺した、妻もこれを知つて身を台下に投じて死んでしまつた。王は失望の怒に燃えて、其塚をして相望ました。すると其後に梓の木があつて、二塚の端に生じ、根は下に交はり、枝は其上に錯はつた。宋王もさすがに哀れに思はざるを得なくなつて、其木を名づけて相思樹といつた。

〔楊貴妃と香〕



ここで『搜神記』の逸話が詳しく紹介される意味について考える上で、本文中で「龍腦の談の圧巻」と言われる楊貴妃と玄宗の逸話でも、『香乘』に記載のない事柄が加えられていることを併せて考える必要があるだろう。(点線部が「楊貴妃と香」本文と『香乘』本文とで一致する部分。棒線部が「楊貴妃と香」本文にあって『香乘』本文には記述のない部分である)。

夏とはいへど微涼を生ずるやうな広い宮殿の中で、玄宗は親王と碁を囲んで居られた。親王は誰かといふと、此談を美しく記した段氏の文には見えぬが、他の書の獨異志といふものには寧王とある。寧王と貴妃との間には、かつて何かあつたのか、いや、知らぬとして置かう。(「楊貴妃と香」)

段氏の文すなわち、『香乘』でも引用されている段成式が書いた『酉陽雜俎』の記事(「上夏日嘗与親王奕碁令賀懷智独弹琵琶貴妃立于局前觀之」)、「上皇發囊泣曰此瑞龍腦香也(酉陽雜俎)」「香乘」にはない、『獨異志』の話を引き、寧王と楊貴妃の関係についてあえて言及するのである。『獨異志』の記事とは、「玄宗偶与寧王博召太真妃立觀」(「上執之澹然而泣曰此吾在位時西国有献香三丸賜太真謂之瑞龍腦」<sup>⑭</sup>)というもので、『獨異志』では、玄宗の碁の相手

香を想う

として寧王の名が挙げられている。『獨異志』では楊貴妃と寧王についてここで詳しく書かれていないが、しかし語り手が「寧王と貴妃との間には、かつて何かあつたのか」という推測をしているのは、『類説』や『說郛』『楊太真外傳』などの楊貴妃外伝に見られる、楊貴妃と寧王に関する逸話を想起させるためであろう。すなわち、楊貴妃が寧王の笛を勝手に持ち出して吹いたことを知った玄宗が、嫉妬し憤激して楊貴妃を屋敷に送り返したが、楊貴妃が髪を切つて詫びたことで許し、さらに寵愛を深めたという話である。<sup>⑮</sup>ここで語り手は、玄宗と楊貴妃の悲恋を詠った白居易「長恨歌」での、玄宗と楊貴妃が互いを「在天願作比翼鳥。在地願為連理枝。」と「比翼の鳥」「連理の枝」に擬えたという有名な逸話には一言も触れず、あえて『香乘』には記載のない、寧王とのエピソードを想起させ、二人の関係を仄めかすのである。

このことは、死しても枝と根を錯え相思樹となつたという、先に紹介した『搜神記』の韓馥とその妻の話とは対照的だ。語り手は、「相思相宜の談」については、龍腦香の匂いが永く続くということを印象づけるために、『香乘』に記載のない記事を取り入れ詳述し、「龍腦も極品になると、是の如く永く保つものもあつたのである」という結論を導き出して、玄宗の逸話が根も葉もない話ではないことを示したと推測できる。しかし同時に、夫婦の強い絆を表わす韓

馮たちの悲恋の伝説をあえて詳しく紹介することで、玄宗と楊貴妃との関係を対比させたのではないか。楊貴妃のまもっていた領布から龍腦の余香を嗅いで玄宗が泣く逸話を、二人の強い絆を表わした悲恋の物語として語り手は美化させはしないのである。

ここで先に三つ目として挙げた、楊貴妃をめぐる逸話についても、語り手が「香乗」では記載のない話を紹介していたことを思い出したい。例えば本文には次のような文章がある。

楊貴妃といへば無類に美麗な人とのみ後の者は思つてゐるか知らぬが、何様して／＼人形のやうな美しさのみを有つて居たのではない、何にも彼にも優れた人で、自分の飼つてゐた白鸚鵡にさへ、おはやうだの、お竹さんだのを言はせて喜んでゐるやうな平凡なわけではない、唐の代になつて出来た経の中でも最も粹な般若心経を読ませた位の、至つた人である。（『楊貴妃と香』）

楊貴妃の白鸚鵡の話は、『楊太真外傳』をはじめとする外伝等できりあげられる有名な話（広南より白鸚鵡を進む。言語を洞曉す。〔…〕上妃をして授るに多心経を以てせしむ。記誦精熟す。『楊太真外傳』）だが、他にも本文では、多くの外伝できりあげられてい

る玄宗との痴話喧嘩の話や、故事として有名な、一捻紅という新種の牡丹を作り出させた話など、楊貴妃についてよく知られている逸話を簡単に紹介している。その上で、語り手は、楊貴妃を「何にも彼にも優れた人」と捉え、「碁を打たせてもおそらくは人の好い天子などよりも一目や二目は強かつたらうと猜せられるのである」と推測する。つまり、優れた楊貴妃に対して、「人の好い」玄宗という人物像を提示し、香の匂いを嗅いで楊貴妃を想い泣く「人の好い」玄宗へ寄り添おうとしているのである。楊貴妃と寧王との関係を仄めかしていたように、楊貴妃と玄宗では『搜神記』の夫婦のような奇蹟は起こり得ない。そこにあるのは、残された玄宗の一方的な想いでしかない。

つまり、この「楊貴妃と香」という話では、残された玄宗が、まさに香によつて今、そこにいない、見ることがかなわない対象への想いを強く掻き立てられる有り様を、あり得そうな話として提示しているのである。残された者の記憶を呼び起こさせ、不在の者、見ることがかなわない者への想いを掻き立てるもの。それこそが「か」香」なのである。

ただし、この話は、単に「か」香」のそうした性質、「にほひ」の世界を伝える話として終わらない。語り手は最後に次のように落ちをつける。

残香臏猶天子の眼中より涙をしほり出したのである。ひよつとすると内障眼にきくかも知れぬ。ハハ、。(「楊貴妃と香」)

楊貴妃を失い二度と見ることがかなわず涙する玄宗の辛さが、目が見えなくなりつつあるという自身のどうにもならない身体へのもどかしさと結びつけられ、しかしそれらは全て、笑いの中で紛らわされてしまう——。植物学としての正しさ＝真相を龍腦樹について追究しなかったように、楊貴妃と寧王との関係を仄めかしつつも、「いや、知らぬとして置かう」と真相を追究しようとはしない語り手は、自身の極めて個人的な問題と結びつけ、その興味の中で楊貴妃と玄宗の話を処理していくのである。

これまで確認してきたように、露伴は「楊貴妃と香」において、『香乗』の記述に主に拠りながらも、『香乗』という書物の名を隠したまま様々な記事を自分なりに配置し繋ぎ合わせつつ、自身の見解を加え、また時には『香乗』以外の書の記事も取り入れながら、「にはひ」の世界を披露していったのである。このように、主として依拠した書物を隠しつつ、諸書の話をつなぎ合わせて展開していくという方法は、露伴がしばしば取っていた方法であった。このことは、『連環記』（『日本評論』昭和一六「一九四一」・四、七）と『大日本史』の関係について指摘した須田千里の研究でも既に明らかに

されている<sup>18)</sup>。しかし、そうした主として依拠した書を隠し、記事を繋ぎ合わせているからといって、この作品の魅力が薄れることはないだろう。主として依拠したテキスト（典拠）を隠しているからこそ、読者は、様々な記事の繋がりと広がり、そしてその飛躍をいっそう楽しむことができるからだ。

#### 4 「楊貴妃と香」と雑誌『知性』

最後にこれまで見てきたような叙述スタイルをとる「楊貴妃と香」が掲載誌『知性』でどのような位置づけにあったのかについて、簡単に確認しておきたい。

「楊貴妃と香」が掲載された号の雑誌『知性』を繙くと、まず、表紙に「楊貴妃と香 露伴道人」「論理と直感 三木清」「特輯・科学する現場」という文字が記されていることに目がいく。この三つの記事がこの号の目玉であったといえるだろう。「楊貴妃と香」の取り上げられ方の大きさには、おそらく大家・露伴というネームバリューと『知性』で露伴の文章が初めて掲載されたという珍しさにも起因していると思われるが、しかしこのように、目立つ形で取り上げられているが故にかえて、他の記事との違いが目につく。巻頭論文の三木清「論理と直感」は、カントの思想を援用しながら「世界形成の論理」となる「構想力の論理」を説いたものだが、こ

の論は、創刊当初から発表されていた三木の一連の論文と繋がるものであった。昭和一三「一九三八」年五月に創刊された『知性』（河出書房）の巻頭論文も、三木清の「知性の新時代」が掲載されており、三木は「歴史的社会的な人間」が「行動人の如く新しい世界を構想」するための「二十世紀の知性」（三木はこれを「構想的な知性」と呼ぶ）の必要性を説いていた。「論理と直感」で説く、「構想力の論理」もそうした先行する三木の論の流れを汲むものであった。このような「二十世紀の知性」が、「日満両国を打つて一丸とする立場は、「生命線」の言葉によつて発見された。日満蒙支を一丸とする一つの言葉は、未だ何処にも発見されない。現代日本の知性はこの言葉を要求する」（Y「知性人」『知性』創刊号）という発言にも見られるように、日中戦争を経て太平洋戦争へと向かっていく情勢と結びつけられ強く求められたものであったことは想像に難くない。また、もう一つの注目記事であった「科学する現場——第一線研究室よりの報告書」という特集は、「国防国家の高度性を維持するためには産業技術を新しい、より生産的な体制の上に置換へなければならぬ。この呼び声は漸く進展してゐるかの如きだが、これが真に実をあげるためには、まづ「科学する現場」よりこれをなさねばならない。この見地から技術者・研究者の第一線よりの報告をもつて今号の特輯とした。」と「編集後記」で記されて

いるように、有益な現場の「知」を具体的に報告するものであった。このような誌面の中で、露伴「楊貴妃と香」で提示された「知」のあり方は異質なものであったといえる。変動する「現実」に即した、新しい「知性」が求められていく最中で、個人的な動機のもと、書物に載せられていた記事・知識を自由に聯絡させながら歴史上の人物の逸話を身近な事として披露し、笑いの中で終えてしまう「楊貴妃と香」は、「知性」で前面に押し出されていた語りとは距離を取っていた。

そしてそうであるが故に、「楊貴妃と香」という作品に見られる遊び心は、時代が下った今でも色あせることがないものとなっているのである。

## 注

- ① 「香談」（露伴全集）第一九卷、昭和五四「一九七九」二、岩波書店
- ② 『香書』は昭和一八年にも石原求龍堂より再版された。露伴は初刊、再版それぞれ異なる題言を書いている。
- ③ 塩谷賛『幸田露伴』（下の二）（中公文庫、昭和五二「一九七七」・五）
- ④ 『露伴全集』第三九卷（昭和五四「一九七九」・一二、岩波書店。なお、柳田泉「露伴先生蔵書瞥見記（二）」（『文学』昭和四一「一九六六」・四）に、「欽定四庫全書総目 摘」の名が見られる。
- ⑤ 『筆記小説大観』収録の『香乘』は、上海進歩書局石印本を用いたもの（一九八三・六、江蘇広陵古籍刻印社出版）や台北新興書局景印本の

もの(民国七六「一九八七」・六)(京都大学人文科学研究所図書室所蔵)等があるが、本文はほぼ同じである。今回は上海進歩書局石印本を用いた江蘇広陵古籍刻印社出版のものを使った。

⑥ 露伴は、『国訳漢文大成』の一六巻で『紅樓夢』の訳注を、一八巻で『水滸伝』の訳注をしている。

⑦ 『欽定四庫全書』(景印文淵閣四庫全書)第八七三冊(子部)、一九八三―一九八六、臺灣商務印書館。『類説』では「明馳」としているものが見受けられる。

⑧ 『梁四公記』でも同様の文章となっている。

⑨ 『欽定四庫全書』(景印文淵閣四庫全書)第八四四冊(子部)、一九八三―一九八六、臺灣商務印書館。

⑩ 柳田泉「露伴先生蔵書瞥見記(一)」「文学」昭和四一「一九六六」・三三。須田千里「幸田露伴『暴風裏花』の原話」(京都大学国文学論叢)平成二六「二〇一四」・二二。では、「暴風裏花」の原話として『虞初統志』を原話としたことが明らかにされている。須田は『虞初統志』が「筆記小説大観」に収録されており、露伴がこれを参照した可能性も指摘している。

⑪ 「甲香は、螺わかのやうなるが、小さくて、口の程の細長にして出でたる、貝の蓋なり」(第三四段)『徒然草』沼波瓊音『徒然草講話』(大正三「一九一四」・一、東亜堂書房)。甲香は香具の一つ。なお、露伴は『徒然草講話』の「序」を書いている。

⑫ 『埤雅』は宋の時代に編纂された訓詁の書。『埤雅』の麝香をめぐる記事は、物集高見『廣文庫』(大正七「一九一八」・五、廣文庫刊行会)の「麝香」の項目にも見られるなど、よく知られていたものだったといえる。

⑬ 「搜神記云。宋大夫韓馮取妻而美。康王奪之。馮怨因之論城旦妻。密遣馮書。(…)俄而馮自殺。乃陰腐其衣王与之。登台遂投台下。左右

香を想う

攬之衣不中。手遺書於帝王。利生不利其死。願以尸骨賜馮而葬乎。王怒不聽。使里人埋之。叔相望曰。爾夫婦相愛不已。能使叔從。則吾不禁也。宿昔有又梓木。生於二家之端。日旬而大盈。抱屈体相就根於下枝錯於上。又有鴛鴦雌雄。右一樹上晨夕交頸。悲鳴音声盛人哀。号其木曰相思堀。相思之名起於此云々。」「香字抄」『統群書類従』昭和三「一九二八」・七、統群書類従完成会)

⑭ 『叢書集成 初編』一〇一(二八三七)(民国二六「一九三七」、上海・商務印書館)

⑮ 「妃子何もなく靈玉の紫玉笛を竊んで吹く。(…)此に因りて又旨に忤まかひ放ち出さる。(…)妃泣いて韜光に謂つて曰く、請ふ妾の罪万死に合ふを奏せよ、衣服の外皆聖恩の賜ふ所なり、唯髪膚は是れ父母の生む所なり、今当に死に即くべし、以て上に謝するなすと。乃ち刀を引き其髪一縷を剪りて韜光に附して以て献す。(…)自後益々鬢へいす。」「楊太真外傳」前掲)

⑯ 『白氏文集』(明四五「九二二」・四、菊地屋)

⑰ 「捨紅の話は『楊太真外傳』などの外伝には見られないが、『故事弁解』(明治一七「八八四」・一一、山口銀造)や『漢詩大講座』(第四卷、昭和一一「一九三六」・三、アトリエ社)等でも故事として引かれている。

⑱ 須田千里「幸田露伴『連環記』と『大日本史』」(『叙説』平成二三「二〇一一」・三)

〔付記〕本文の引用は、『露伴全集』第一五卷(昭和五三「一九七八」・一、岩波書店)に拠る。引用に際し、旧字は新字に改め、振り仮名や圈点等は適宜省略した。引用文中の(…)は省略を、(〳)は割注を表す。